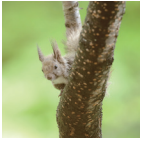


回り道の末にたどり着いた異分野融合研究 —たくさんの出会いと試行錯誤が、研究を形づくるまで—



若 者

辻 田 那 月*

A Detour-Filled Journey into Trans-disciplinary Research:

How Many Encounters and Trials Came Together to Shape My Research

Key Words: Life style, Project-based learning, Selective mutism, Trans-disciplinarity

はじめに

「専門分野は何ですか」とよく聞かれますが、私は今もなお、その問いに向き合い続けています。大学入学当初から、「この分野で研究がしたい」という明確な目標があったわけではありませんでした。むしろ、その時々に関心を引かれた活動に向き合いながら、研究だけに限らず、幅広い分野の学びや経験を重ねてきました。

本稿では、研究をしたいのかどうかさえ定まらない状態から出発し、迷いや試行錯誤を重ねながら、異なる分野や立場の人々と関わる中で、自分なりの研究に対する向き合い方が少しずつ形づくられ、現在の異分野融合研究に至るまでの過程を振り返りたいと思います。

迷いの先で出会った「研究」

大学では、言語学、教育学、心理学、生理学など、関心の赴くままに幅広い分野の授業を履修しました。また、研究以外の進路も知っておきたいと考え、企業でのインターンにも半年間参加しました。しかし、決められた業務をこなすという働き方は、自分にはあまり向いていないと感じるようになりました。

そこで次に考えたのが、海外に行ってみるという選択肢でした。内閣府主催の国際交流事業「世界青年の船」に参加し、日本を含む13か国、約300名の参加者と1か月以上にわたる船上での共同生活を体験しました。年齢や職業に加え、宗教や文化的背景

も異なる人々と日常を共にする中で、お祈りの時間があったり、食事に制限があったりと、生活習慣が人によって実にさまざまであることを実感しました。こうした生活習慣の違いと健康との関連を、データとして収集・分析できたら、面白い論文になるのではないかと考えるようになり、そこから自分は研究がしたいのだと、はっきりと自覚するようになりました。

研究中心だった生活の揺らぎ

学部時代の海外での経験を通して芽生えた生活習慣への関心をもとに、大学院では、生活習慣とメンタルヘルスとの関係を研究テーマとして設定しました。具体的には、うつ傾向のある人となない人とで、運動や食事といった生活習慣にどのような違いがあるのか、また自律神経活動や血中ホルモン濃度といった生理学的指標にどのような差が見られるのかを調査しました。

企業や病院との共同研究にも携わり、健康な大学生から高齢者、統合失調症や認知症の患者さんまで、幅広い対象者と関わりながらデータ収集を行っていました。当時は、調査や測定のために外へ出る時間を除けば、ほとんどを研究室で過ごす、研究センターの日々でした。

そうした中で結婚・出産を経験しました。妊娠から体調や生活の変化が重なり、出産後の育児も想像以上に負担が大きく、研究を続けたい気持ちはありながらも、生活は次第に子ども中心へと移っていききました。あれほど没頭していた研究も、当時は子どもとの時間を奪うもののように感じられ、前向きに取り組むことが難しい時期が続きました。博士論文の執筆と育児を何とか並行して進めてはいましたが、研究にも育児にも十分に向き合えていないという感覚が拭えず、この先どのように進んでいけばよ



* Natsuki TSUJITA

1989年8月生まれ
京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻 博士後期課程修了
現在、大阪大学 学際大学院機構 超域イノベーション博士課程プログラム 特任助教(常勤) 博士(人間・環境学)
TEL: 06-6879-7430
E-mail: tsujita.natsuki@cbi.osaka-u.ac.jp

いのか分からないまま、悩む時期が続きました。

保護者として出会った「場面緘黙」

転機となったのは、子どもが入園してからのことでした。家庭では少しずつ言葉が増えていた一方で、園ではまったく話さない状態が続いていました。保育士として働いていた母から「場面緘黙(ばめんかんもく)ではないか」と指摘され、私はその言葉を初めて知りました。

場面緘黙とは、家庭など安心できる場では話せるにもかかわらず、園や学校といった特定の状況では話すことができなくなる不安症の一つです。当初は「そのうち慣れれば話せるようになるだろう」と楽観的に受け止めていましたが、日が経っても状況は改善せず、子どもは次第に登園そのものを嫌がるようになり、やがて登園できなくなってしまいました。

研究者として、これまでうつに関する研究では、論文を通じて多くの知見を得てきた経験があったため、場面緘黙についても研究に基づく知見が蓄積されているはずだと考え、文献を探しました。しかし、国内外を問わず研究は限られており、書籍や一般向けの情報もほとんど見当たりませんでした。一方で、病院や園に相談しても、「様子を見ましょう」と言われるだけで、具体的な支援につながりにくい状況でした。

こうした状況の中で、まず必要だと感じたのは、同じ立場の保護者が安心して悩みや経験を共有できる場でした。そこで「場面緘黙親の会」¹⁾を立ち上げ、オンラインを中心に保護者同士がつながる場をつくりました。

日々交わされる相談や経験に触れ続ける中で、場面緘黙に対応できる支援者が驚くほど少ないという現実に直面しました。その背景として、支援者が場面緘黙について学ぶための機会そのものが、ほとんど提供されていないためではないかと感じるようになりました。さらにその根底には、場面緘黙を専門とする研究者が少なく、研究知見が十分に蓄積・共有されていないという課題があるのではないかとこの問題意識を強く持つようになりました。

こうした気づきを重ねる中で、保護者同士が支え合う場は確かに重要である一方で、それだけでは根本的な解決にはつながらないことも実感するようになりました。そして、専門的な知見を積み重ね、そ

れを実践につなげていく研究の役割が不可欠であると、研究者として改めて意識するようになりました。

研究者としての専門性と、保護者としての経験の両方を持つ立場だからこそ、研究と実践をつなぐ役割を担えるのではないかと考えるようになり、博士号取得を一つの区切りとして、場面緘黙を自身の研究の軸として定めるに至りました。

異なる研究文化に向き合う中で

場面緘黙を研究の軸として定めた後に直面したのは、研究分野が変わることで見えてきた研究文化の違いでした。何から手をつければよいのか分からない中で、最初に取り組んだのが、これまで国内で行われてきた場面緘黙の治療研究や支援研究を整理するレビューでした²⁾。文献を読み進めるうちに、場面緘黙に関する研究や実践が、医学、教育、福祉など、実に幅広い領域で行われていることが見えてきました。

それと同時に、これまで主に触れてきた医学系の研究とは、研究の進め方や成果の示し方が大きく異なることを実感しました。多数の対象者から得られたデータを統計的に分析する研究が中心だったこれまでにに対し、場面緘黙の分野では、一人の子どもを対象に、支援や介入の経過そのものを丁寧に記述する研究も多く見られました。対象者の規模や分析方法が異なるだけでなく、何を研究の成果として示すのかという前提自体が分野ごとに異なるため、当初は読みにくさを感じる論文も多く、その研究がどのような意義をもつのか把握するのが難しいと感じることもありました。しかし、そうした論文を数多く読み進める中で、統計的な分析を伴わなくとも、丁寧に積み重ねられた記録からは、一人ひとりの子どもの変化や支援のプロセスが具体的に伝わってくることに、次第に気づくようになりました。

学会に参加するようになってからも同様で、従来参加していた学会では、参加者は研究者や企業関係者が中心でしたが、場面緘黙に関連する学会では、学校教員や公認心理師、言語聴覚士、作業療法士など、日常的に子どもと関わる現場の支援者も多く参加していました。そのため、相手の専門や関心に応じて、どこまで背景を説明し、どのような言葉や表現を選べば伝わるのかを常に考えながら話す必要がありました。こうしたやりとりを重ねる中で、研究

者でない人にも研究の意義や結果の意味が伝わるように説明する工夫を、自然と意識するようになりました。その結果、自分の研究を異なる立場の人にどのように伝えるかを考える視点が少しずつ養われていったように感じています。

加えて、発表形式そのものも大きく異なっており、これまでは口頭発表が中心で、質疑応答も限られた時間内で行われるのが一般的でしたが、場面緘黙に関連する学会では、ポスター発表や自主シンポジウム、ラウンドテーブルなど、参加者とじっくり議論できる形式が主流でした。ポスターの構成や抄録の分量・書き方など、準備段階では戸惑う点も多々ありましたが、その分、発表の場では多くの支援者とじっくり対話する機会が生まれました。現場での実践や悩み、日々の工夫について具体的な話を聞く中で、研究成果がどのように現場で受け止められているのか、また現場ではどのような研究が求められているのかを考えるようになりました。

このように、論文の書き方や学会の参加者、発表形式のいずれも、これまで慣れ親しんできた研究の在り方とは大きく異なり、戸惑いを感じる場面も少なくありませんでした。しかし、そうした違いを最初から否定せず、まずは受け入れてみることで、それぞれの研究文化が大切にしている視点や価値が少しずつ見えてくるようになりました。今となっては、異なる研究文化に身を置き、違いを受け入れる経験を重ねてきたことこそが、分野や立場の違いを越えて対話し、協働しながら研究を進めていくための、重要な土台となっていると感じています。

異分野融合を実践し、伝える立場として

現在は、大阪大学の超域イノベーション博士課程プログラムに関わりながら、異なる分野や立場の人々と協働する異分野融合研究に取り組んでいます。本プログラムには、工学、薬学、人間科学、人文学など、学内すべての研究科から教員と大学院生が参加しており、博士課程の学生が自身の専門分野に軸足を置きつつ、分野横断的な視点や他者と協働する姿勢を身につけることを目的としています。こうした環境に身を置く中で、私自身も異分野融合研究について改めて考えるようになりました。

私にとって異分野融合研究とは、研究分野や職種、立場の異なる人たちと対話を重ねながら、研究や実

践の方向性を皆で探り、組み立てていく過程そのものを楽しむ営みです。分野ごとに重視する点や進め方が異なるからこそ、議論の中で思いがけない視点やアイデアが生まれ、研究の可能性が少しずつ広がっていきます。試みがうまくいかないこともあります。やってみたい研究や実践のアイデアを出し合う中で、必要な人や場、専門が自然と結びつき、構想が次第に形になっていく——その一連の過程そのものに、異分野融合研究の面白さがあると感じています。

こうした考え方を大切にしながら、現在も異なる立場の人々と協働する形で研究や実践に取り組んでいます。場面緘黙をテーマとした取り組みとしては、小学校教員と連携し、学級内で継続できる発話支援方法の開発に関わってきました³⁾。また、芸術学や古生物学など、専門や研究文化の異なる研究者と協働し、発話を前提とせずに参加できる学びの機会を保障することを目的とした、博物館でのワークショップにも取り組んできました⁴⁾。

さらに、こうした異分野協働の経験を活かし、社会課題解決を担う人材の育成を目的とした教育実践にも取り組んできました。大学院生を対象とした海外でのフィールド実習では、文化的・社会的背景の異なるマレーシアでの経験を通して、学生が自身の専門や価値観を捉え直す中で、社会課題の捉え方がどのように変化するのかを検討してきました⁵⁾。加えて、地域住民や大学生と協働し、地域が抱える社会課題に向き合うプロジェクトにも関わってきました。

これまでに取り組んできた多様な実践を通して培ってきた経験や視点を、超域イノベーション博士課程プログラムの中で学生たちに伝えていくことも、現在の私の重要な役割の一つだと考えています。異分野融合研究に実際に取り組む中で見えてくる楽しさや、新しい視点が開けていく感覚だけでなく、その途中で生じる戸惑いや葛藤、思うように進まない難しさも含めて、学生たちと共有し、学生一人ひとりが自分なりのかたちで異分野融合研究に向き合っていけるよう、支えていきたいと思っています。

おわりに

これまでの歩みは、最初から進む道がはっきり見えていたわけではありませんでした。そもそも、研究がしたいのかどうかさえ、当初は明確になってい

ませんでした。それでも立ち止まるのではなく、まずはやってみようと、その時々に関心を引かれた活動に向き合いながら、迷いや試行錯誤を重ねてきました。

そうした遠回りの中で、多様な分野や立場の人と関わってきた経験は、すぐに研究成果として目に見える形になるものではありませんでした。そのため当時は、一つの専門分野を深く掘り下げ、着実に成果を積み重ねていく周囲と比べて、自分の歩みが遠回りに思え、焦りを感じることも少なくありませんでした。しかし今になって振り返ると、こうした経験の積み重ねこそが、研究や実践に向き合う際の姿勢や、人と協働する場面での考え方を形づくり、現在の異分野融合研究の取り組みに活かされているのだと感じています。

本当にやりたいことは、必ずしもすぐに見つかるものではありません。だからこそ、その時にやってみたいと感じたことに、思い切って飛び込んでみる姿勢が大切なのだと思います。専門分野とは直接関係しないように見えるために、意味がなさそうだと感じて参加の対象から外してしまいがちな活動であっても、最初から距離を置いてしまうのではなく、まずは前向きに関わってみてほしいと思います。そうした経験の中で得られる新しい視点や人とのつながりが、異分野融合研究の出発点になるかもしれません。

参考文献

- 1) 場面緘黙親の会. <https://www.selectivemutism.jp/> (最終閲覧日: 2026年1月6日)
- 2) Iimura, D., Tsujita, N. & Hagihara, H. (2023) Prospects for Clinical Reports on Selective Mutism Conducted in Japan: A Scoping Review. *Japanese Psychological Research*.
- 3) 吉本悠太・山中智央・辻田那月(印刷中)継続的な発話・応答に不安をもつ場面緘黙児童への学級担任による発話支援—開発プログラム「マイチャレンジ」を用いた1年間の取り組み—. *学校メンタルヘルス*, 28(2).
- 4) 辻田那月・小川歩人・田島知之・許俊卿(2025) 定量分析による海外フィールド・スタディの高度汎用力育成効果の検証: マレーシアにおける海外研修プログラムの事例報告. *Co*Design NOTE*, 7, 1-23.
- 5) 山中智央・辻田那月・高田佳奈・藤間友里亜・花井智也(印刷中)場面緘黙児を対象とした博物館でのワークショップの設計と初期的検討—事前支援と参加を促す環境づくり—. *場面緘黙研究*, 4(1).

